

大岡昇平

ある補充兵の戦い



ある補充兵の

大岡昇平

ある補充兵の戦い

©一九七七
換印廃止

昭和五十二年十二月十五日印刷
昭和五十二年十二月三十日発行

著者 大岡 昇平

発行者 徳間 康快

発行所 現代史出版会

東京都港区新橋四一〇一
〒105 電話四三一・二二四九

本文・ミツワ印刷
オフセット・真生印刷
製本・ナショナル製本

発売 徳間書店

東京都港区新橋四一〇一
〒105 電話四三三・六二三一
振替東京四一四四三九一

ある補充兵の戦い
目次

出 征	7
海上にて	37
比島に着いた補充兵	53
サンホセの聖母	70
暗号手	88
俘虜逃亡	106
襲 撃	118
敗走紀行	132
西矢隊奮戦	162

山中露宮

178

捉まるまで

193

ユ一・ア一・ヘヴィ

240

忘れ得ぬ人々

254

女中の子

272

わが復員

290

編集あとがき

311

装幀 熊谷博人

ある補充兵の戦い

出征

明方の兵舎を我々は歩いていった。薄暗い電燈に照らされた影の多い室内には、兵達の鼾と我々の靴音のみ響いた。古い兵舎の匂い、木と油と埃と汗の混った匂いとも、今日でお別れかと思えば懐かしくもある。

昭和十九年六月十日の明方であった。我々東京の補充兵は三ヵ月の教育召集を終え、今日解放されるはずであった。着替えの衣服も数日前の面会で受け取ってあった。私ほか一人の僚友は今最後の不寝番に就いているところである。

一廻りして玄関に立っていると、衛兵下番の古兵が一人帰って来た。我々は駆け寄り敬礼していった。

「陸軍二等兵大岡はか一名、不寝番勤務中、異状ありません。御苦労様でありました」
最後の一句は衛兵勤務の疲労に対する挨拶である。古兵は捨科白を残して階段を上ろうとした。僚

友はこの古兵と親しかった。彼はその背中に向って幾分馴れ馴れしく、

「自分等の最後の不寝番であります」といった。相手は振り向き、

「え、お前達前線行きじゃねえのか」といった。

衝撃は例えば我々の体を通り抜けたようであった。それは我々が除隊の喜びの底に漠然と感じていた危惧で、全然不意を突かれたものではなかったが、膝に力が抜けたように感じ、口を利くことは出来なかった。

「おっと、いっちゃいけなかったのか」と古兵は呟き、曖昧に笑って上って行った。

入営当初我々はこの東部第二部隊（近衛歩兵第一聯隊）の補充にあてられる予定らしく、教育方針も何等前線出動を予想させぬのんびりしたものであったが、次第に様子が変になって来た。不意に退船訓練が行われ、熱帯衛生についての学科があったりした。同時に都内に伝染病発生の理由で面会は禁止された。我々が教育満期と共に南方に送られるのだという噂が、何処からともなく伝わり出した。それは入営当初は我々のむしろ覚悟していたところであったが、なまじ最初の教育がゆるやかであっただけに、我々は裏切られたような不満を覚えた。しかし数日前面会が許され、全員除隊用の私物を受け取るに及んで、不安は一応解消した。

しかし営内の様子は依然として変であった。使役が隣接の東部第三部隊の倉庫に送られ、明らかに南方用と思われる被服を受領して来た。不安を感じた一人の兵は倉庫係の下士官に、

「班長殿、自分等は前線へ行くのでありませんか」と訊いたが、返事は、「だって、お前達もう私物を貰ったんだろう」だけだったそうである。下士官の顔は無表情で、何も読みとることは出来な

った。

「俺達を騙して、被服の使役までさせるのはひどすぎる。まさかそんなこともあるめえ」とその兵はいったが、「そんなこと」はやはりあったのである。

それから起床まで不寝番の短い残りの時間、我々は互いに口を利かなかった。口にするのが怖ろしい問題だったのである。

古兵の間違いであればいい、きつと間違いに相違ない、というのがやはり我々の唯一の希望であった。この軽率な古兵は三年たつても上等兵になれない劣等生で、我々が彼にその階級を思い出させないために、特に「何々三年兵殿」と呼ばねばならぬ種類の兵隊であった。

起床、点呼、食事と続く忙しい朝の行事にも、兵達の動作と会話は一段と活発であった。多くの者がその日の午後家族と共にすべき楽しい予定について語った。彼等の様子を見て、朝の事件はやはり私の喉につかえたままであった。

食事の後、中隊全部の初年兵約百名が一室に集合させられた。教官の最後の訓示がある由である。教官は一葉の紙を持っていた。一段高いところへ上ると彼はいった。

「今これから名前を呼ぶ者は直ちに除隊。呼ばない者は残る」

そして呼んで行った。順序は不同らしかった。呼び進むに連れ、私の前に立った兵士の肩が次第に細かく震えて行くのに私は気がついた。その兵も私も到頭名を呼ばれなかった。

信じられないことが起ったのである。聞き洩らしたのではないかと、私はもう一度ゆっくり教官の呼んだ名前を頭の中で繰り返そうとした。しかしそんなことが出来るはずはなく、ただたしかに私が

呼ばれなかったという感じだけがはっきりして来た。

百名中約半数が残った。私の班からは四十名中十六名が残った。教官は、「除隊する者は、私物に着替えて直ちに営庭に整列」といって、あとは我々の顔を見ないように横を向いて去った。

慌しい一瞬であった。別れの挨拶をする暇もない。去る者も我々にいうべき言葉もないところである。彼等が背広や国民服に着替え短靴を穿く動作に現われた、何かいそいそとした調子は、残る者の胸をえぐった。

去った者の被服や装具を種別別に卓上に積み上げるのが、残留者に課せられた最初の残酷な任務であった。それを済ますと下士官に引率されて営庭へ出た。

除隊者達は既に訓示を受け終った後であった。彼等の地方人の服装を眺めるのは我々にとって新しい苦痛であった。三十分前まで我々だってその服を着るつもりだったのである。我々は一列に並んで向い合い、教官の命令で一斉に敬礼した。型の如く指をこめかみに当てながら私は除隊者の中の親しい者の顔を見ることが出来なかった。視線は彼等の頭上の一点に固定したまま動かなかった。

教官は我々を集めていった。

「みなお前達が無事に前線に着くためにやったことだから悪く思うなよ。敵の諜報機関の活動は近頃とみに活発を加え、部隊が動くことが洩れると、必ず潜水艦が近海に現われる」

その日のうちに我々は全部新しい被服を渡された。被服はやはり第三部隊の倉庫から受領して来た

南方用のものであった。すべて新品であったが、帯革が布製なら靴は鮫皮という風に、みな今まで教育用に使っていた、古いが堅牢なものに比べて、著しくちやちやであった。全部身につけて見ると我ながら間が抜けて、玩具の兵隊のように感じられた。

その恰好で我々は翌日宮庭に整列し、聯隊長の訓示を受けた。我々はその日附をもって新たに臨時召集とされ、隣りの東部第三部隊で、輸送大隊に編成される由である。外泊は依然防諜の見地から許されず、詭計によって受け取らされた私物を返しかたがた、通知者一人を限って十六日に面会が許される。

神戸の或る造船所に勤務する私は東京に家族を持っていなかった。面会はいつも東京に在住する友人に来て貰う。彼は私が半年ばかり前に辞めた神戸の工業会社の東京支社員で、現在は勤務先を異にしているが、新しい会社私に私はまだ友人を持つに到らなかったのも、専ら彼を煩わして煙草その他必需品を差し入れて貰っていた。

唯一の通知者として私は無論その友人を選んだが、私の問題は神戸の家族を呼ぶべきか否かであった。家族は妻と二人の子供であるが、神戸に生れて一度も東京に出たことがない妻に、果して二人の子供を連れて上京さすべきか否か、が問題であった。最初教育召集の令状を受けた時、私は無論出征を覚悟したが、教育召集であるから普通の例に従って、一日くらい帰れるものとして、別れて来てあった。殊に前の面会で私物を受け取った時、友人は彼女に除隊の予定を告げたであろうから、今頃妻は待っているはずである。

私は妻を呼ぶまいと思った。一時間ぐらい会っても仕方がない。そのため旅馴れぬ彼女に困難な旅

をさせ、不案内な東京をうろろさすには当るまい。会っても会わなくても、私が前線に送られ、敗軍の中に死ぬのは同じことである。未練だ。

出征はかねて私の予期していたことであつた。十八年の秋私が前の会社を辞めた時、私は日本が負けつつあること、近い将来に私のような三十代の補充兵も前線で死なねばならぬ時が来るのを覚悟した。問題はそれまで私の生涯の最後の日をどう過すかであつた。いずれにしても資産のない私は勤め口を見つけねばならないのであるが、当時私には二つの候補があつた。一つは俸給もよし勤務も楽であるが、出征後家族に手当を出さない所、一つは前の二つの条件は両方とも悪いが、入社当日に召集されても家族に本俸を支払う所であつた。生涯の最後の日、という観点からすれば、無論前者をとるべきであつたが、私は反省した。もし私がそっちをとれば、召集されて前線で死ぬまでの間に、きつと後悔するであらう。「よし、ここで死んでしまえ」と私は思った。いづれ身すぎ世すぎにすぎない仕事に、多少の安楽のために後悔の種を作るべきではない。私はこの決定をした神戸の暗い坂道をまだ覚えている。そして私は或る造船所の事務員となり、朝六時に家を出て、夜八時に帰って半年を暮した。召集令状が来た時、私は自分の予想が的中したことに秘かに快哉を叫んだが、予想は何もそうの中する必要もなかったのは事実である。

そしてその時自分を殺してしまった私の気持から推せば、今家族に会う会わないはどっちでもいいのである。

私は妻を呼ばないことにきめ、面会に来る友人に託すべき遺言を書いた。その文面はほぼ憶えている。

「生きて還るつもりであるが、死ぬかもわからない。あなたは多分ひとりで子供を育てるつもりになるだろうが、それは必ずしも私の望みではない。俸せがあると思つたら迷つてはいけない。

軀絵（これは五歳になる長女の名である）は器量が悪いから、よく勉強をして賢くならないとお嫁に貰い手がないといつてくれ。

貞一（これは三歳の長男）は器量がいいから、気をつけないと不良少年になる。

子供達へ。お父さんはいなくなるかも知れないが、お母さんを大事にして立派な人にならなければいけない。お父さんがいないからといって、駄目になるような子は、お父さんの子供ではない」

最後の言葉は子供達が大きくなった時、感傷によつて多少とも彼等を刺戟することが出来ればいいぐらいの気持で、附け加えたものである。私は自分がこれまで自分一人で運を切り開いて來たと自惚れていたのである。

私達の班は温和な近衛聯隊長の奇妙な街学趣味によつて、専門学校以上を出た者ばかり集めていた。そして農民や労働者とは別な方針で教育すれば、時間の経済である上、優秀な兵隊が出来る上だろう、というのが彼の夢であつたが、現実はこちらに反した。農民出の班長や助教が、我々の差別待遇に示した嫉視と意地悪は別としても、何よりも聯隊長はこれ等学校出の道德的腐敗を勘定に入れてなかつたのである。

我々は三ヵ月の教育期間を何とか胡麻化して過そうと思つていず、その胡麻化し方は正確に学校において学課を出来るだけ胡麻化して、卒業証書だけを握ろうとした方法と同じであつた。いかに旧弊な日本の軍隊が我々に課する日課は愚劣にして苛酷なものであるが、それは我々がそれを陋劣

に胡麻化す口実とはならない。

私はこれら僚友の様子を見て、私の子供は、学校へ入れるのをよそうかと思つたくらいである。社会が腐敗している以上、学生だけを腐敗から守ろうとしても出来ない相談である。私は大正の成金であつた父の出世主義により「体に元手をつけといてやる」という意味で、普通最高といわれる教育を受けた者であるが、書籍を自由に読める齡に達して以来、学校の教師からは何一つ教わつた覚えがない。私の子供が私の死によって学資を失うのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却つて学生の集团的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の倖せかも知れない。

こういうことも私が自分がいなくなつても、必ずしも子供の發展を扼することにはならないと考へた根拠であつた。現代の親の扶養の義務は子供を甘やかすだけのものである。

しかしこれら腐敗した学校出の補充兵の態度には、前線行きときまると、明瞭な変化が現われた。彼等の学生的狡智は一瞬にして影を潜め、一種の優しいたわりの感情が我々を結んだようである。いやな仕事はなるべく他人に譲るといふそれまでの狡智は、大抵は自ら進んでやるといふ相互扶助の精神と替へられた。(しかしこれも仲間の一部が幸運に赴き、自分等だけ不幸の中に残された、という事実から出た一時の共通の感情にすぎなかつたらしい。以来前線へ送られる途中、及び駐屯中の諸の軍隊日常の必要は、我々を再び元のエゴイストとし、それは米軍が上陸して敗兵と化しても去らなかつた。)

或る者は私の妻子を呼ばないという決意をなじらんばかりであつた。彼は新潟にいる妻を電報で呼んだところであつた。